

和の風 町長随想 増澤 善和

南越前町の活断層(一)

九月一日は防災の日。これは大正十二年九月一日に関東大震災で東京が大きな被害を受けたことを記念したもの。この大地震を機に東京帝国大学地震研究所が開設され、「災害は忘れた頃にやってくる」の名句を残した寺田寅彦(東京帝大地球物理学者)がこの研究所の兼任研究員となつて、日本の地震を科学的究明するためのスタートとなつた。江戸時代には「地中の大ナマズが暴れると地震」(原因)とか、「ナマズやドジョウが暴れると地震が起きる」(予知)などといわれてきた。しかし、明治二十四年の濃尾地震のときに地表に大きな断層(左図⑮根尾谷断層)が出現したことにより、地震は断層の動きによって生じるとされ(原因)、断層が将来も活動する可能性のあるものを「活断層」と名付けられ、この活断層の多少から地震の起こる場所を推定(予知)すること

も可能となった。日本列島の活断層の陸上分布図をみると著しい地域性がある。活断層密度が高いのは、中部地方から近畿北部であり、この辺りは世界でも活断層密度が最も密な所となっている。先月中旬沖地震で大きな被害が出たが、向こう岸の火事ではない。私たちの町にも目の前に原発の巣がある。二つのダムまである。防災の日を機に、当町付近の直下型地震をおこす活断層について考えてみたい。

A 南越前町を囲む活断層帯

1. 敦賀湾〜伊勢湾帯
敦賀湾東岸の米ノ浦を起点とする甲楽城断層・山中断層・柳ヶ瀬断層(左図⑮⑳㉔㉕㉖)・関ヶ原断層・養老断層・伊勢湾断層で終点となる。この断層帯は、本州中部を横断する糸魚川〜静岡帯(フオッサマガナ帯)や温見・根尾谷断層帯と並ぶ大きな活断層帯である。

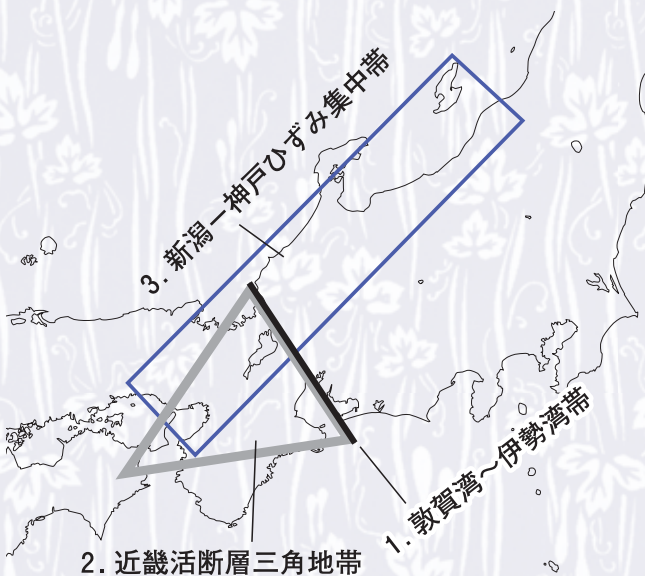
2. 近畿活断層三角地帯
甲楽城断層北端の米ノ浦を

頂点とし、先述の敦賀湾〜伊勢湾帯を北東辺、米ノ浦から淡路島南西部を結ぶ線を北西辺、淡路島南部〜和歌山〜伊勢湾南部(中央構造線)を底辺とする三角形の地域であり、断層運動の新しさが地形によく表れている地域でもある。特に六甲山南麓から神戸・宝塚にかけてと、琵琶湖北部から敦賀にかけては活断層の巣となっている。

3. 新潟〜神戸ひびき集中帯
新潟沖から神戸市にかけて幅約百キロメートルの帯状範囲内の地殻で、最近活断層によるひびきが大きくなつていると言われている。政府の地震調査委員会は、先月の中越沖地震は、平成十六年の中越地震、今年の能登半島地震・昭和三十九年の新潟地震・平成七年の兵庫県南部地震等と同じこのひびき集中帯でおきたと発表した。古くは福井地震(昭和二十三年)や濃尾地震(明治二十四年)も同じであらう。

南越前町は今のところ平穏無事であるが、この三つの大きな活断層帯上にあることは事実なのである。(以下次号へ)

南越前町を囲む3つの活断層帯



活断層名一覧

番号	活断層名	確実度	活動度	番号	活断層名	確実度	活動度
①	剣ヶ岳断層	II	B	⑮	根尾谷地震断層	—	—
②	細呂木断層	II	B	⑯	谷汲断層	I	B~C
③	篠岡断層	II	B	⑰	池田山断層	II	B
④	松岡断層	II	B	⑱	笹ヶ峰断層	II	B~C
⑤	福井地震断層	—	—	⑳	金草岳断層	I	B
⑥	更毛断層	II	B	㉑	孫谷断層	III	—
⑦	笹川断層	II	—	㉒	甲楽城断層	I~II	B
⑧	宝泉寺断層	II	B~C	㉓	山中断層	I~II	C
⑨	—	—	—	㉔	柳ヶ瀬断層	I	B
⑩	鯖江西縁断層	II	B	㉕	柳ヶ瀬山断層	II	B~C
⑪	鯖江断層	II	B	㉖	浦底断層	I	—
⑫	—	—	—	㉗	敦賀断層	I	B
⑬	—	—	—	⑳	—	—	—
⑭	宝慶寺断層	II	B~C	㉑	西方ヶ岳断層	III	C
⑮	温見断層	I	A~B	㉒	—	—	—
⑯	温見地震断層	—	—	㉓	野坂山断層	I	B
⑰	根尾谷断層	I	A	㉔	白木・丹生断層	III	B~C

福井県活断層図

(若狭地区を除く)

